



鳥塚 莞爾 先生 御略歴

- 昭和 26 年 3 月 京都大学医学部医学科卒業
- 昭和 26 年 4 月 京都大学医学部附属病院において実地修練
- 昭和 28 年 4 月 高松赤十字病院内科医員
- 昭和 30 年 7 月 京都大学大学院医学研究科入学（第二内科）
- 昭和 34 年 3 月 同修了、医学博士の学位を受く
- 昭和 34 年 5 月 京都大学医学部附属病院助手（第二内科）
- 昭和 37 年 9 月 ポストン市マサチューセッツ総合病院内分泌部門研究員
（昭和 38 年 11 月まで）
- 昭和 40 年 4 月 京都大学医学部附属病院放射線部助教授
- 昭和 47 年 2 月 京都大学医学部教授（放射線医学講座）
および附属病院放射線部長
- 昭和 49 年 10 月 第 1 回世界核医学会組織委員会委員、
同京都セッション組織委員会委員長
- 昭和 50 年 10 月 第 15 回日本核医学会会長
- 昭和 51 年 11 月 京都大学医学部教授（核医学講座）
- 昭和 55 年 4 月 京都大学放射線生物研究センター長併任（昭和 61 年 3 月まで）
- 昭和 61 年 5 月 福井医科大学副学長
- 昭和 61 年 11 月 京都大学名誉教授
- 平成 元年 4 月 福井医科大学学長（平成 7 年 3 月まで）
- 平成 7 年 4 月 福井医科大学名誉教授
- 平成 7 年 4 月 財団法人 浜松市医療公社顧問
- 平成 8 年 9 月 第 6 回アジア大洋州核医学会会長
- 平成 9 年 7 月 日本学術会議会員（平成 12 年 7 月まで）
- 平成 15 年 6 月 財団法人（現 公益財団法人）体質研究会 理事長
- 平成 22 年 11 月 財団法人 慢性疾患・リハビリテーション研究振興財団
（現 公益財団法人 ひと・健康・未来研究財団） 理事長
- 平成 25 年 7 月 27 日 逝去 享年 86 歳

主な受賞

- 昭和 42 年 11 月 第 4 回日本核医学会賞
昭和 62 年 6 月 日本内分泌学会第 30 回甲状腺分科会特別功労賞
平成 元年 1 月 鳥津科学技術振興財団功労者表彰（鳥津賞）
平成 14 年 4 月 勲二等瑞宝章
平成 14 年 10 月 第 8 回世界核医学会学会賞

鳥塚 莞爾 先生の役員歴（日本核医学会）

- 会 長 昭和 49 年 7 月 15 日～昭和 50 年 10 月 28 日
理 事 長 昭和 56 年 10 月 18 日～昭和 58 年 9 月 25 日
理 事 昭和 48 年 8 月 30 日～昭和 52 年 12 月 1 日
昭和 54 年 11 月 30 日～昭和 58 年 9 月 25 日
昭和 60 年 10 月 12 日～平成 元年 10 月 19 日
監 事 昭和 52 年 12 月 2 日～昭和 54 年 11 月 29 日
評 議 員 創立時～平成 7 年 10 月 6 日
名誉会員 平成 7 年 10 月 5 日

追悼 鳥塚莞爾先生

名誉会員の鳥塚莞爾先生が平成 25 年 7 月 27 日に肺炎のため、ご逝去されました。私ども門下生は先生ご夫妻の米寿のお祝いを 9 月に計画していた矢先のこと、あまりのご急逝に茫然とし、深い悲しみに包まれています。

先生はわが国における核医学のパイオニアとして終生、臨床核医学の発展と普及にリーダーシップを発揮され、多くの放射線・核医学の専門医、研究者を育成されました。

京都大学医学部をご卒業後、第二内科に入局、甲状腺疾患の診療と研究に¹³¹I を用いられたことが核医学に進まれる契機となりました。ボストンのマサチューセッツ総合病院への 1 年余の留学の後、放射線部助教授に昇進されました。当時はシンチスキャナーからシンチカメラへの移行期であり、^{99m}Tc など新しい核種の登場とコンピュータの利用により、先生は脳、肺、心臓を始めとする全身各臓器の機能の画像化へと急速に研究分野を拡大されました。基礎研究においてもラジオイムノアッセイを用いて甲状腺、骨カルシウム代謝、消化管ホルモンや腫瘍マーカーの研究など、イン・ビトロ核医学を推進されました。

この間、放射性医薬品の開発には薬学部の横山陽教授と、新しい機器、画像処理技術の開発には工学部の桑原道義教授と、それぞれ共同研究を進められ大きな成果を挙げられました。

昭和 47 年に京都大学医学部放射線医学講座の第三代教授にご就任され、続いて 4 年後には新設された核医学講座の初代教授に移られました。そして、これを機に放射線医学における診断と治療という二つの分野を、二講座で分担する複合講座の体制を創り上げられました。

X 線 CT に加え、超音波断層装置や MRI の導入など急速な画像診断の進歩の中、PACS の研究などを通じ、画像情報の統合化、効率化にも取り組まれました。核医学領域ではエミッション CT の開発を進められ、昭和 55 年に日本アイソトープ協会のサイクロトロン核医学利用専門委員会委員長になられて以後、ポジトロン放出核種の臨床利用の推進が先生のライフワークとなりました。

昭和 58 年には、わが国の大学病院として最初の小型サイクロトロンおよび放射線医学総合研究所などとの共同開発による全身用 PET スキャナを設置され、PET の臨床応用に向けた研究がスタートしました。

先生はざっくばらんで磊落なお人柄で多くの人を引き付ける方でしたので、自然に先生の周囲には若い医師、医学生が集まり、医局は大変活気に満ちていました。

その後、福井医科大学へ赴かれて学長にご就任になりましたが、同大学に「高エネルギー医学研究センター」を設立されて、ここでも PET の臨床研究の推進に尽力されました。さらに、ご退官後は、浜松市で 3 度目の PET センターの立ち上げをされました。

この間、先生は PET 検査の保険採用に向けた日本核医学会および日本アイソトープ協会医学・薬学部会の活動を、自ら先頭に立ってリードされ、平成 8 年に¹⁵O-標識酸素ガスを用いる PET 検査、その後平成 14 年に至り FDG-PET の保険収載が実現しました。これによりわが国でも PET が広く日常臨床に活用される日を迎えることができました。

これらのご功績により、平成 14 年 4 月に勲二等瑞宝章を受章。同年 10 月には、第 8 回世界核医学会において、親交のあった米国核医学会の第一人者ヘンリー・ワグナー教授とともに学会賞を受賞されています。

ここに先生の御遺徳とご功績をたたえ、長年にわたるご指導に心から感謝するとともに、ご冥福を心よりお祈りいたします。

京都大学名誉教授 小西 淳二